精神薄弱児の動機づけに関する研究

加　藤　義　男

Ⅰ．問　題

精神薄弱児（以下，精薄児と略す）によって示されるパーソナリティ特性を，彼等に固有な生得的なものであるととらえるのではなく，彼等の置かれてきている環境条件の中での周囲の人々とのかかわり合いを通して学習され，形成されてきたものであろうと考える基本的な方向づけに立って，本研究を行なっていきたい。

そして本研究においては，精薄児のパーソナリティにおける硬さ（rigidity）の問題をとりあげ，Lewin-Kounin の認知的硬さ理論の対立概念として，Zigler らによって提唱された硬さに関する動機づけ理論に注目し，それについての実証的な検討を行なう事を目的とするものである。

硬さに関する動機づけ理論においては，精薄児によって示される硬さ行動を，彼等の置かれてきた環境条件に基づく動機づけの強さから説明しようとする。つまり，精薄児は比較的強い社会的遮断（social deprivation）の状況に置かれてきており，その為に大人との接触や大人からの支持や承認を得ようとする動機づけが強まり，その結果として硬さといわれる行動をより多く示すのであろうと考えている。

そこで，本実験に先立って次の２つの仮説をたてる。（仮説１）精薄児に対する社会的強化条件は，無強化条件に比べてより高い遂行をもたらすであろう。（仮説２）社会的遮断をより強くうけてきている精薄児（高遮断群）は，比較的それをうけてきていない精薄児（低遮断群）に比べて，大人との接触や大人からの支持や承認に対するより強い動機づけを持っており，その為により大きな硬さ行動を示すであろう。

更に，以上の仮説に基づいて次の５つの仮定を設定した。（仮定１）社会的強化群は，無強化群に比べて，より長時間課題を遂行するであろう。（仮定２）高遮断群は，低遮断群に比べて，より長時間課題を遂行するであろう。（仮定３）高遮断群は，低遮断群に比べて，許された最大限の時間の遂行をする者がより多いであろう。（仮定４）遂行量における増加の割合は，社会的強化群の方が無強化群に比べてより大きいであろう。（仮定５）仮定４における社会的強化群と無強化群の間の増加の割合における差異は，高遮断群の方が低遮断群に比べてより大きいであろう。

又，本実験においては，これらの仮定を検討する中で，同時に，それにみられる実験者による効果についての検討も行なっていく事にする。

Ⅱ．実　験

Ⅱ１．方　法

(1)被験者：本実験における被験者は次の通りである。(i)施設収容精薄児…三重県にある精薄児収容施設M学園の児童18名（男女９名ずつ。MA平均 6.1才（ＳＤ＝1.1），ＣＡ平均15.2才（ＳＤ＝2.47））(ii)家庭在住精薄児…名古屋市内にある２つの中学校の特殊学級児童25名（その内女子13名。MA平均7.8才（ＳＤ＝2.44），ＣＡ平均13.7才（ＳＤ＝1.22））

尚，(i)(ii)の被験者共に，MAを基準として社会的強化群と無強化群とに分けられた。

(2)実験者：実験者の違いによる効果をみる為に２つの変数―①性差，②被験者に対する親密さの違い―を導入し，次の２人の実験者によって実験が行なわれた。(i)実験者$U_{(W)}$…被験者にとって未知（unfamiliar）の大人であり女性（woman），(ii)実験者$F_{(M)}$…被験者にとって親密（familiar）な大人であり男性（male）。

実験はすべて個人実験であり，２人の実験者によって，同一の被験者に対して，５ケ月程の間隔をおいて同じ条件で２度実施された。又，実験者$F_{(M)}$は，被験者との親密な関係をつくる為に，実験前に延べ５日間程M学園と各中学校を訪れ，被験者と自由に接触する機会をもった。

(3)実験課題及び手続き：実験課題としてマーブル入れゲームを採用した。それは，表面に２つの穴があけてあり，底面は斜面となっている容器の中に，３つずつ用意された黒と白のマーブルを表面の穴から１つずつ入れていくという，単純な繰り返し運動からなる飽和課題である。

その実験手続きは表１に示した通りである。

ここにおいて，マーブル入れゲームにおける遂行量（容器に入れられたマーブルの数量）を行動記録器によ

表1　実　験　手　続　き

順序	内容	条件	
		強化群	無強化群
① 導入	被験者を実験室まで導入。不安除去		
② 予備ゲーム	60秒間実施	60秒後に言語強化	言語強化なし
③ 第1ゲーム	飽和するまで実施。但し許された最大限時間は15分間	20秒毎に言語強化	言語強化なし さりげない関心
④ 第2ゲーム	第1ゲームとはマーブルの位置交換，飽和するまで実施。但し許された最大限時間は15分間	20秒毎に言語強化	言語強化なし さりげない関心

って測定し，更に第1ゲーム及び第2ゲームの遂行時間を測定した。

(4)**実験日時**：実験は1969年5，6月と11月に実施された。

(5)**社会的遮断についての評定**：Zigler, Butterfield & Goff (1966)[1] の研究を参考にして評定項目を作成し，家庭在住精薄児[2]及び施設収容精薄児の収容前にうけてきた社会的遮断の程度についての評定を実施した。一方，種々の側面から検討した結果，M学園は比較的遮断された状況にあると言えるであろうと結論づけた。

以上の諸点から，(i)施設収容精薄児を高遮断群，家庭在住精薄児を低遮断群として分類し，(ii)一方，家庭在住精薄児内部及び施設収容精薄児内部における高遮断群と低遮断群との分類を行なった。

Ⅱ-2. 結　果

(1)全体の被験者における社会的強化群と無強化群との比較を行なった結果，(i)課題の遂行時間において，実験者U(w) の場合は，社会的強化群の方が無強化群に比べて有意に長い遂行時間を示し，実験者F(M) の場合も，有意ではないが，社会的強化群の方がより長い遂行時間を示した。（仮定1をほぼ検証）(ii)2人の実験者の場合共に，第1ゲームの最初の1分間における遂行量の増加において，社会的強化群の方が，無強化群に比べて有意に大きな増加の割合を示し，第1ゲーム及び第2ゲームの平均1分間における遂行量の増加においても，有意ではないが社会的強化群の方がより大きな増加の割合を示した（仮定4をほぼ検証）。

以上の(i)(ii)の結果から，仮説1はほぼ検証されたものと考える。

(2)高遮断群としての施設収容精薄児と，低遮断群としての家庭在住精薄児との比較を行なった結果，(i)2人の実験者の場合共に，課題の遂行時間において，施設収容精薄児の方が家庭住精薄児に比べて有意に長い遂行時間を示した（仮定2を検証）。(ii)許された最大限の時間である15分間課題を遂行した者の割合は，2人の実験者の場合共に，施設収容精薄児の方が家庭在住精薄児に比べて有意に大きかった（仮定3を検証）。(iii)遂行量の増加の割合における社会的強化群と無強化群の間の差異において，家庭在住精薄児の場合は，いずれにも有意差が認められなかったが，施設収容精薄児の場合は，殆んどにおいて有意差が認められた（仮定5をほぼ検証）。

以上の(i)(ii)(iii)の結果から，ここにおいては仮説2がほぼ検証され，硬さに関する動機づけ理論に対して支持が与えられたものと言える。

(3)家庭在住精薄児における高遮断群と低遮断群との間の比較を行なった結果，課題遂行時間及び遂行量の増加の割合において，仮定2及び仮定5と一致した傾向が示されたのであるが，実験計画の不十分さからそれを十分確めるまでに至らなかった。

(4)施設収容精薄児における収容前の高遮断群と低遮断群との間の比較を行なった結果，仮定2及び仮定5と一致した傾向が示されず，むしろ逆の傾向すら示唆され

註(1) 社会的遮断とは，その子供の生活史を通して，周囲の人々，特に母親を中心とする養育者との情緒的なかかわり合いの中で，それらの人々との接触や，それらの人々からの支持や承認などから遮断されている状態である，と考える。

(2) Zigler, E., Butterfield, C., & Goff, G. "A measure of preinstitutional social deprivation for institutionalized retardates. Amer. J. Ment. Defici., 70, 873～885.

た。この事は，収容前の社会的遮断の程度との関連における収容後の社会的強化に対する動機づけの強さの変化によるものであろうと考察され，この点における検証は今後の問題として残された。

Ⅲ．今後の問題

本実験においては，多くの問題点が指摘され，今後の問題として残された。

(1)家庭在住精薄児内部における高遮断群と低遮断群の間の十分な比較検討は，今後の問題として残された。

(2)施設収容精薄児内部における収容前の高遮断群と低遮断群との間の十分な比較検討及び，そうした収容前の状況と収容後の状況との間の相互作用についての検討などは，今後の問題として残された。

(3)実験者による効果については，予測した程明確に示されなかったと言える。ここにおいて，実験計画及び変数の操作に関する問題点が指摘され，実験者による効果についての十分な検討及び結論は今後の問題として残された。

(4)社会的遮断については，概念そのものの広義性，曖昧性が指摘され，更にその評定についての種々の問題点，及び被験者の認知に関する問題点などが数多く指摘され，今後の研究におけるより一層の方法論的検討の必要性が示唆された。